

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

1 環境学習・郷土愛の育成 — 「地域巡検」 —

阿寒の自然を題材に、地域学習をふんだんに取り入れ、地域の自然や文化を愛する生徒の育成に努めている。地歴公民科・理科が中心となって実施しており、今年度で18回目になる。毎年阿寒の自然や、歴史、文化について学習し、現地に行って体験した後、レポートとしてまとめている。特に1学年では釧路湿原国立公園、2学年では阿寒国立公園の2つの国立公園について学習する。

1学年では釧路湿原国立公園内で鳥獣保護センター、北斗遺跡、釧路湿原ネイチャーセンターの協力をいただき、湿原や生態系、擦紋文化について主に学習している。また、釧路湿原再生事業「ワンダグリンド・プロジェクト」にも参加している。

2学年では阿寒湖畔で阿寒湖畔EMCやNPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構の協力のもと、植生や生態系、火山や阿寒湖群の形成の仕方について学習している。今年度は特定外来種に指定されている、ウチダザリガニの駆除・調理体験を行った。

また、昨年度は阿寒湖畔のアイヌ文化についての学習をイコロシアターで人形劇を通して学ぶなど、文化的な学習も行っている。



2 『「市民性」を育む開発教育』に参加

本校の生徒会執行部生徒2名が『「市民性」を育む開発教育』に参加した。「民族性を考える～先住民族アイヌの権利と文化伝承の課題」と題した分科会では、ワークショップを通してアイヌの歴史を共有し、伝統文化伝承の現状とその諸課題を考えた。北海道大学のJeff Gayman氏、平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員補の関根健司氏、アイヌアートプロジェクト代表の結城幸司氏による、基調講演が行われた。

3 『北海道高等学校ユネスコ研究大会』への参加（生徒会）

札幌市の北海商科大学で行われた「2015年度青少年国際交流の集い第43回北海道高等学校ユネスコ研究大会」に生徒会執行部の生徒3名が参加した。

今年度のテーマである「ユネスコと多文化共生」についてフィンランドの国・人・文化についての講演を聴き、日本では考える機会の少ない移民の問題や他文化について知ることができた。

その後、8カ国の外国人のパネリストの方々と、学校行事などの文化の違いについて意見交換を行い、多文化理解を深めた。

1日目の終わりには経験交流会を行い、他校の生徒や外国人の方々と軽食を取りながら日本と海外の違いや、学校の特徴について交流した。

2日目は、午前中に多文化共生の意義についての講演の後、高校生によるベトナムでの活動報告を聴き、ベトナムの国や文化、現地での活動の様子について知ることができた。

午後からは、「高校生の国際協力」「異文化理解」「地球社会の」の3つの分科会に分かれて、昼食をとりながら学びを深めた。

他校のユネスコスクールとしての考え方や、活動について知ることができたため、今後本校の生徒会活動や行事に積極的に取り入れていきたいと考えている。



4. 書き損じはがきの募集（生徒会・全校生徒）

1月下旬～2月上旬にかけて、生徒会執行部の生徒が、通常よりも早く登校し、書き損じはがき回収を生徒玄関前で呼び掛けた。回収箱の設置も合わせて34部ほど回収できた。年度内での突発的な企画だったため、「ユネスコ世界寺子屋運動」には参加できなかったが、今後は回収したはがきを蓄積し、「ユネスコ世界寺子屋運動」に参加する予定である。

5. 自然体験活動（1～2年）

阿寒湖にて散策路や湖の上を、スノーシューで歩いたり、雪の上を滑ったりする自然体験活動を行った。単に、雪遊びをするだけでなく、車も乗ることができる氷の耐久性や、野生動物の身近さなどを理解し、自然の雄大さと身近な冬との新たな付き合い方を学んだ。（計画では伝統行事である、雌阿寒岳登山を企画していたが、噴火リスクなどを考慮し、スノーシュー体験へ変更した。次年度は登山を実施予定）

午後からは湖の氷の上で行われる、わかさぎ釣りを体験した。1時間という短い時間での実施だったが、一人当たり9匹を釣り上げるという結果だった。釣ったわかさぎは天ぷらにして食し、生徒たちは自然のありがたみを感じた一日を過ごすことができた。

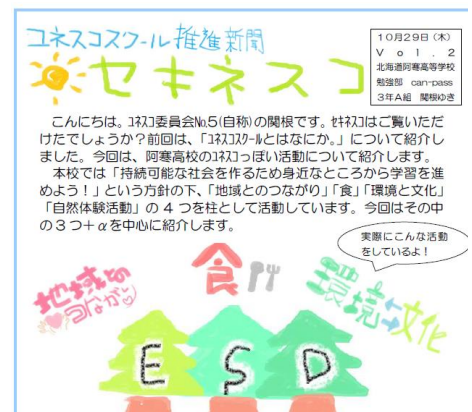
活動全体を通して、2名の保護者の参加もあったこと、また、釧路新聞のインタビューを受けた生徒がいたことなどから、意図としないところでも生徒の成長につながる場面が多かった。

金川 定各 兼介 厚司 平成28年(2016年)2月25日(木曜日)



6. 勉強部生徒による活動（3年生個人）

本校既存の勉強部「can-pass」の生徒（3年生）が、ユネスコスクールに関する探究的な学習をした。全校生徒へのアンケートを実施した際、回答から「ユネスコスクールに登録されたことは知っているが、学校生活は何も変わっていないのでは？」という一般生徒の考えに着目し、ユネスコスクールとしての自覚を学校全体で高めていくため、「ユネスコスクール推進新聞セキネスコ」（全①～⑤号）を発行した。記事の内容は生徒自身が学校で行っている活動をユネスコスクールとしての活動として捉え直したり、ゴミの分別で環境保護を呼び掛けたりするなどとするもので、校内の委員会の生徒や教職員にインタビューしてまとめたものである。また、本人目線で本校での学びをESDカレンダーにまとめ、2月26日の「学習成果報告会」にて20名ほどの教職員・本校生徒の前で発表した。報告会では、自分が卒業した後、本校がユネスコスクールとして活動しやすいよう、在校生はもちろん、新入生や新しく勤務する教員に向けて「阿寒高校ユネスコスクールまるわかりBOOK」と題した冊子の作成・発表も行った。本人が教員志望であることもあって、教科間のつながりや地域と連携することの重要性を認識させる良い機会となった。



(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）